

かつての石巻

石巻市は、縄文時代以来の豊かな歴史があります。
過去にも災害で被害を受けたことはありますが、その都度立ち上がってきました。
ここで石巻の歴史を振り返ってみましょう。

縄文のかがやき

豊かな海と山の幸に恵まれた縄文時代

縄文人は、クリ・クルミなどの木の実を主食とし、狩猟や採集する魚や貝、鹿・鳥などを副食としていました。

海に囲まれた石巻市は、縄文時代は、入り江が奥まで入り込み、豊富な海産資源に恵まれていました。また、北上山地最南端の山々には、食料となる多くの動植物が存在していました。

そのため、市内には国指定史跡の沼津貝塚をはじめ、多くの縄文時代の遺跡が残っていて、当時としてはかなり豊かな生活であったことがわかります。

また、貝塚などから出土する遺物は、芸術性に優れたものも多く、縄文人の深い精神世界を覗くことができます。

防災集団移転地である牡鹿地域の給分浜・小湊浜で行われた発掘調査で、牡鹿半島の高台に縄文時代の大きな集落があったことがわかりました。豊かな海に近く、森林が背後にあるリアスの海岸は、縄文時代では一番生活しやすい場所といえるかもしれません。



国指定史跡沼津貝塚

沼津貝塚は、縄文時代から平安時代までの遺物が出土する大貝塚で縄文時代は、海が近くまで迫っていたと考えられています。付近の山には、食料となるさまざまな動植物がいたことでしょう。(点線で囲んだ部分が貝塚です)

◀沼津貝塚航空写真



沼津貝塚出土土台付浅鉢 (毛利コレクション) ▶



▲鹿の角で作られた釣り針と銚先（毛利コレクション）

鹿の角は、丈夫で、比較的加工しやすく、釣り針や銚先などに用いられました。

縄文人は、こうした石器を使って狩猟や採集を行っていました。特に弓矢の発明は、画期的で、これにより鳥や小動物を用意に捕まえることができるようになりました。



縄文時代の石器▶



▲南境貝塚出土の土偶（毛利コレクション）

土偶は、このように一部が欠けた状態で出土することがほとんどで、妊娠した女性をあらわしている場合も多く、何らかの呪術に使われたものではないかと推定されています。



▲南境貝塚出土香炉方土器

稲作が始まってから(古代の石巻)

稲作が伝わり、石巻地域の人々の生活も大きく変わったと考えられますが、弥生時代の石巻の状況を伝える資料や遺跡はごく少なく、稲作が始まったことはわかりません。

弥生時代の次の古墳時代になると、遺跡がたくさん見つかっています。

石巻市内の古墳時代の古墳としては、桃生地域の袖沢古墳群から朝顔型の埴輪が出土しています。

須江糠塚遺跡、田道町遺跡、新金沼遺跡、新山崎遺跡、五松山洞窟遺跡などからは当時の人々の様子がわかる資料が出土しています。特に新金沼遺跡からは、この地域の古墳時代の土器といっしょに東海系の土器と北海道系の土器が同時出土し、古代から石巻地域が、人々が交流する場所であったことがわかりました。

新金沼遺跡から程近い新山崎遺跡からは、西日本から伝わった方形周溝墓が発見されていて、石巻地域は比較的早く、畿内勢力(大和朝廷)の支配下に組み込まれていたと思われます。



▲新金沼遺跡から出土した北海道系の続縄文土器



▲方形周溝墓航空写真

方形周溝墓は、四方に溝を掘って、その土を溝の内側に盛り上げた墓で、宮城県が北限になっています。



▲東海系の土器

畿内に律令国家が成立し、東北地方中部以北にもその勢力が及んでくると、律令制度に基づいた郡が置かれました。石巻地域は牡鹿郡が置かれ、その後、牡鹿郡の一部が桃生郡となりました。この時期の石巻地域には在地系(蝦夷系)の人々と東国からの移民系の人々がいたことがわかっています。何らかの役所跡と推定されている田道町遺跡からは在地系の人々に対して出挙(すいこ)と呼ばれる一種の課税が行われていたことが確認されています。

ただし、平安時代には、「貞観地震」が発生し、石巻地域も大きな被害を受けたと考えられますが、今のところその津波堆積物は見つっていますが、具体的な被害が確認できる文献史料・遺跡は見つかりません。



▲田道町遺跡から出土の木簡
延暦11年(792)



▲清水尻遺跡出土墨書土器

清水尻遺跡は、田道町遺跡に隣接する遺跡で、やはり何らかの役所跡と考えられている。

さらに時代が進み、平安時代の終わりごろには、渥美半島系の工人が来て焼いたと見られる壺と窯跡が発見されています。平泉藤原氏の需要を満たすためのものと考えられています。このころの石巻は、平泉と北上川舟運で結ばれ、その外港であったと考えられています。



▲和泉沢古墳

武士の時代の石巻(中世の石巻)

鎌倉時代以降は、ほとんどは関東の御家人の所領となり、現在の市域は、牡鹿郡・遠島・桃生郡・本吉(良)荘・深谷保にわかれていました。

特に牡鹿郡は、有力御家人として平泉付近を所領とした葛西氏の飛び地とされました。以後牡鹿郡および遠島は、戦国時代まで葛西氏の所領でした。

桃生郡の北方(河北・雄勝・桃生)は、山内首藤氏の所領となり、「永正合戦」(1511～15年ころ)で葛西氏に敗れ、葛西氏領となったと伝えられています。

深谷(河南地域・東松島市)は、相模国三浦郡長江(長柄)を名字の地とした長江義景が、奥州合戦に従軍し、その戦功により奥州桃生郡南方の深谷保を賜ったとされ、その子孫は、豊臣秀吉の奥羽仕置まで続いています。

本吉(良)荘は、今の北上町十三浜地域が属していたと考えられる荘園で、摂関家の荘園でした。奥州藤原氏の秀衡の四男高衡は「本吉冠者」と称していたことが記録に見え、藤原氏時代は、息子に管轄させるほど重要な地域であったとされています。ただし、産金地であった以外のことは、よくわかっておらず、実際に後の本吉郡の範囲がすべて本吉荘であったかも不明です。戦国時代までには葛西氏領になったと考えられますが、史料が残っていないことから、詳細は不明です。

北上川舟運で平泉と結びついていた石巻地方は、葛西氏・山内首藤氏・長江氏の所領として戦国時代まで続きました。しかし、この時代のことは、意外にわかっていません。確かな史料からはこの時代を描き出すのは困難です。

ただ、関東御家人であった、この三つの氏族は関東の文化を伝えています。その典型的な例が「板碑」の造立です。板碑は、卒塔婆の一種で関東地方に多いのですが、石巻地方でも盛んに造立されていました。しかも、仙台周辺などが比較的早く造立の習慣が廃れてしまいましたが、石巻地方は戦国時代までも板碑の造立は続いていました。

葛西氏は奥羽仕置で、長江氏はその後の伊達政宗の仕置でいずれも滅亡し、石巻地方はすべて仙台藩領となりました。



▲水沼窯跡出土壺